

本学の2017年のエジプト現地調査報告

吉村 作治（東日本国際大学（以下本学と記述）学長・教授）
黒河内宏昌（本学客員教授）・高橋 寿光（本学客員講師）
河合 望（金沢大学准教授）・矢澤 健（本学客員准教授）
岩出まゆみ（本学客員教授 本学エジプト考古学研究所所長）

【要 旨】

本稿は学校法人昌平畿東日本国際大学エジプト考古学研究所による2017年の調査報告である。第2の太陽の船（現場主任：黒河内宏昌）、ギザ台地西部墓地探査（現場主任：高橋寿光）、アブ・シール南丘陵遺跡（現場主任：河合望）、ダハシュール北遺跡（現場主任：矢澤健）、王家の谷アメンヘテプ3世王墓（現場主任：西坂朗子）の5つの遺跡でプロジェクトが進行している。本稿は休止しているアメンヘテプ3世王墓を除く2017年の成果についてまとめ、最後にエジプト考古学研究所による事業報告を付したものである。

【Abstract】

This paper briefly reports the results of research project conducted by Institute of Egyptian Archaeology, Higashi Nippon International University, Japan. Five projects are underway: Second Solarboat of Khufu (Field chief: Hiromasa Kurokochi), Abusir South (Field chief: Nozomu Kawai), Dahshur North (Field chief: Ken Yazawa), Tomb of Amenhotep III (Field chief: Akiko Nishisaka). The summary for the results of the researches in 2017 are provided below, except the project of Tomb of Amenhotep III which has been suspended. The last chapter reports the activity of the Institute.

（1）はじめに（吉村作治）

本学のエジプト研究は（1）現地調査、（2）調査の結果のまとめと研究、（3）各調査に関わった研究員の比較研究、（4）研究と調査の成果の公開、（5）個人研究など調査の成果を国内・外の学会や研究会で発表、などに分かれています。その中でも各研究員が最も力を入れているのが、現地調査

です。現地調査の現場は、①ギザ台地クフ王ピラミッド南側に位置する、第2の太陽の船での発掘、修復、保存処理そして復原といった今世紀でもかなり大型のプロジェクト（現場主任：黒河内宏昌教授）、②ギザ台地西部墓地の地下探査（現場主任：高橋寿光講師）、③アブ・シール南丘陵遺跡（現場主任：河合望准教授）、④ダハシュール北遺跡（現場主任：矢澤健准教授）、⑤ルクソール西岸アメンヘテプ3世王墓修復（現場主任：西坂朗子准教授）の5ヶ所であります。

①の第2の太陽の船プロジェクトは、1987年にその存在を電磁波探査レーダーで発見して以来、30年の月日が経っています。しかし、その間、1988年から2007年の約20年間は資金がないため凍結期間、その後の悪意的な妨害工作、そしてエジプト革命、大臣の度々の首のすげ替えなどの多数の障害がありました。しかしそれを乗り越え、ようやく部材の発掘、取り上げ、修復、保存処理、スキャンによる三次元測量、実測のほぼ70%が終了したのです。しかし現在は最大で20mの長さの船の側板の取り上げなど、最後の詰めに入っています。2009年に大テントを作り上げ、そして大テントの中のラボテント、ピットを覆うテント、取り上げた石蓋を覆うガレージテント、大型木材の修復を行うテクニカルテントと、テントだけでも5つ、その電源としてのジェネレーター室、エアコン室、空気循環室、プレハブの事務棟、研究棟、建物だけで8つも作ったわけです。もちろん地元の業者さんをお願いしたのですが、設計図は現場主任の手によって作られました。しかし一番大事だったのはピットを覆っていた42枚の石蓋を取り上げる装置、ガントリークレーンで、既存のものがなかったためすべて手作りでした。設計施工は、戸田さんという石工さんでした。今、取上げの中心は高橋寿光、修復保存の中心は西坂朗子とカナン・ヨシムラです。そこに約40名のエジプト人修復師がついていて、日々作業を行っています。こうした全てのオペレーションのコーディネイトを仕切っているのは、バーセル・ヨシムラとムハンマド・アシュリー、ユーセフ・ナバラウィの3名で、考古省などの役所関係との渉外を行っています。

よって、総勢60名ばかりの人が日々、ギザ台地の現場で働いています。おそらく船の部材を全て取り上げ、修復保存、3Dスキャナーを使った復原図が出来上がるのにあと2年半、2020年の3月末でしょう。そこから修復と組み立てを始めて4年、2024年に完成し、GEM（大エジプト博物館）別館で出来上がったものをツーリストに観ていただけるものと思います。私は82歳となっています。その間、コンピューターを利用して、古代エジプト人が夢想した太陽の船が大空を飛んでいるDVDを作りたいと思っています。

②のクフ王のピラミッド脇、西部墓地の探査プロジェクトです。これは私が以前から主張している「ピラミッドは王の墓ではない」という説を証明するプロジェクトです。どう考えてもピラミッドが墓であるはずはないのですが、おおむねの人は何の根拠もないのにピラミッドは王の墓であると伝えています。日本の高校の教科書にもそう書いてあります。そしていくら議論をしても何の結論も出ません。そこで私は20年前からピラミッドの周辺をまわって墓探しをしてきました。そこでクフ王のピラミッドの西部墓地に目をつけ、探査権を申請し、2016年3月ようやく許可を取りま

した。2016年5月に第1次の探査を開始し、2017年3月から5月に第2次調査を、2017年の8月に第3次調査をしました。今のところ西部墓地中央部にあるピラミッド群の建設施工の責任者、ヘリオポリスの大神官、ヘムオンのマスタバ墓の周辺に可能性があるところまでいきました。今後、残りの地域を探査し、4、5年後には発掘しようと考えています。ともかく目標地区を決めて、それから発掘するのははじめてですので、ワクワクしています。

ペルーと宗像を調査してみてわかったことですが、エジプトのピラミッドの思想（死生観やピラミッドの配置、太陽の船の存在意義など）は時を経て世界各地に広がっています。南米ペルーではピラミッドの西に当たるところに当時の支配者とその家族や家臣の墓が何十基とあり、宗像大社の西の方向に、当時の支配者の前方後円墳とその周辺に10数の家臣の円墳があります。これらを総合して考えると、ギザのクフ王のピラミッドの西側にクフ王の墓があるに違いないという結論が導き出されるのです。西の方とか西側といった言い方をするのは、日没は季節や場所によって場所が多少ずれるため、大雑把な言い方をするわけです。第一古代には磁石はなかったわけで正しい西を示すことができません。今後もクフ王のピラミッドの西側を調査すると同時にオリエント、ペルシア、インドをはじめ世界各地の墳墓の中の壁画やレリーフそしてその位置を調査する必要があるのです。また、ローゼット文の東西の伝播やスフィンクスの日本への影響（スフィンクスは狛犬となる）、その他日本の祭りの神輿、相撲など数々の影響があります。こうした比較文化を大切にしていかないと真の文化はわからないのです。だんだんスケールが大きくなってきて、楽しみが増してきました。

③のアブ・シール南丘陵遺跡は、1991年に電磁波探査レーダーによって発見された遺跡です。1989年にはじまったピラミッドをめぐる調査ラッシュでギザに於ける調査活動が中止されたため、別の地域を探査レーダーで発見したのが本遺跡です。最初の年に新王国時代第19王朝ラメセス2世の第4王子、カエムワセトの葬祭神殿の発見があり、下エジプトの習慣で葬祭神殿と墳墓が分離していて近くに配置されることからその周辺を発掘しましたが、今のところ見つかっていません。カエムワセトの墳墓の探索中、岩窟の空間を発見し、クフ王の名のついた女神のライオン像（小型スフィンクス）などを発見しました。その後2009年には、カエムワセトの娘、イシスネフェルトの墓を見つけましたが、未だに本人の墓が見つかっていません。本年は残された可能性のあるところを探査しています。

④ダハシュール北遺跡は人工衛星の画像解析によって発見された遺跡で、すでに初年度にツタンカーメン王の側近イパイの墓（トゥームチャペル）が発見され、2005年にセヌウの墓、2007年にウアイイ、セベクハトとセネイトエス夫妻の墓、チャイの埋葬が未盗掘の完全ミイラの形で発見されています。現在200墓近い貴族墓やトゥーム・チャペルが出土していますが、おそらく500墓近い墳墓があると見られますので、まだまだ時間がかかると思われます。

⑤王家の谷西谷、アメンヘテプ3世王墓の修復保存プロジェクトは現在ユネスコの都合で休止し

ています。

以上が2017年の本学のエジプト調査の概要ですが、以下各調査（アメンヘテプ3世王墓を除く）の詳細の報告を書きます。

（2）第2の太陽の船プロジェクト（黒河内宏昌）

吉村作治本学学長は2008年より、カイロ郊外ギザ遺跡のクフ王ピラミッド複合体において、地中に分解、収蔵されている大型木造船（太陽の船あるいはクフ王第2の船と通称）の発掘・保存・復原プロジェクトを行っている。この事業は日本（東日本国際大学）とエジプト（エジプト考古省）の共同プロジェクトであり、現在は独立行政法人国際協力機構（JICA）からの援助と、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A「古代エジプト・クフ王第2の船の復原に関する研究」）を得て進めている。復原後の船は現在JICAの支援で建設中のGreat Egyptian Museum（大エジプト博物館）に展示される計画である。

プロジェクトの具体的な活動は①ピットから部材を取り上げ、②応急的な強化処理と破損個所の修復を行い、③各部材を測量してそれらを組み立てて出来上がる船の復原案を作成し、④部材をGrand Egyptian Museum Conservation Center（大エジプト博物館保存修復センター）へ移送するという4段階の作業からなっている。またその成果の公開するために⑤広報・学会報告を行っている。以下に2017年の成果を各項目別に報告する。

①部材の取り上げ

分解された船の部材は大まかに見ると、当初の船の形を踏襲してピットの中に配置されている。2016年までに、甲板室や甲板といった船の上部構造の部材を取り上げ、2017年からはそれらの下に置かれていた下部構造すなわち船体を構成する比較的大型の部材に着手した（図1）。すでに1980年代に復原を終えたクフ王第1の船との比較から、ピットの中には推定1200点の部材が収納されていると推測されるが、2016年までに721点、そして2017年は49点（総計770点、10月末現在）の部材を取り上げている。この作業の担当は日本側が高橋寿光（東日本国際大学エジプト考古学研究所客員講師）、エジプト側はマムドゥーフ・ターハ（Supervisor, Giza Inspectorate,



図1 部材取り上げの光景

Ministry of Antiquities) 他である。

②保存修復

部材はピットの中ですでにかなり劣化が進んでおり、取り上げたのちは必要に応じて応急的な強化処理を施し、すでに崩壊している部位については可能な限り修復する必要がある(図2)。そして③の測量と考察により復原案が出来上がったのち、我々は再び部材の強化とオリジナルの形への矯正を行う予定である。したがって現時点での応急的な強化処理には、可逆性(取り除くことが出来る)と可塑性(変形することが出来る)を備えるアクリル樹脂のパラロイドB72を用いている。2016年までに686点、2017年は59点(総計745点、10月末現在)の部材の保存処理を終えている。この作業の担当は日本側が西坂朗子(東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授)、リチャード・ジャスキ(保存修復家)、吉村佳南(同前)、エジプト側がアイーサ・ジダン(Grand Egyptian Museum Conservation Center, General Director) 他である。



図2 保存修復の光景

③測量と組み立て復原考察

保存修復を終えた部材を詳細に観察、測量し、図化したのちに、それらが当初どのように組み合わさって船を形作っていたかを考察する。その過程においては、部材に古代の大工が記した文字記号の採集とその意味の考察も重要な研究となる。2017年は甲板室と甲板の図化を終え、それぞれの組み合わせの復原考察を終えた(図3)。その結果、それらの部位は第1の船と全体の形状がほとんど同じであることが判明した。2016年までに570点、そして2017年は81点(総計651点、10月末現在)の部材の測量を終えている。この作業の担当は日本側が柏木裕之(東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授)、山田綾乃(早稲田大学文学学術院助手)、エジプト側がマムドゥーフ・ターハ(前

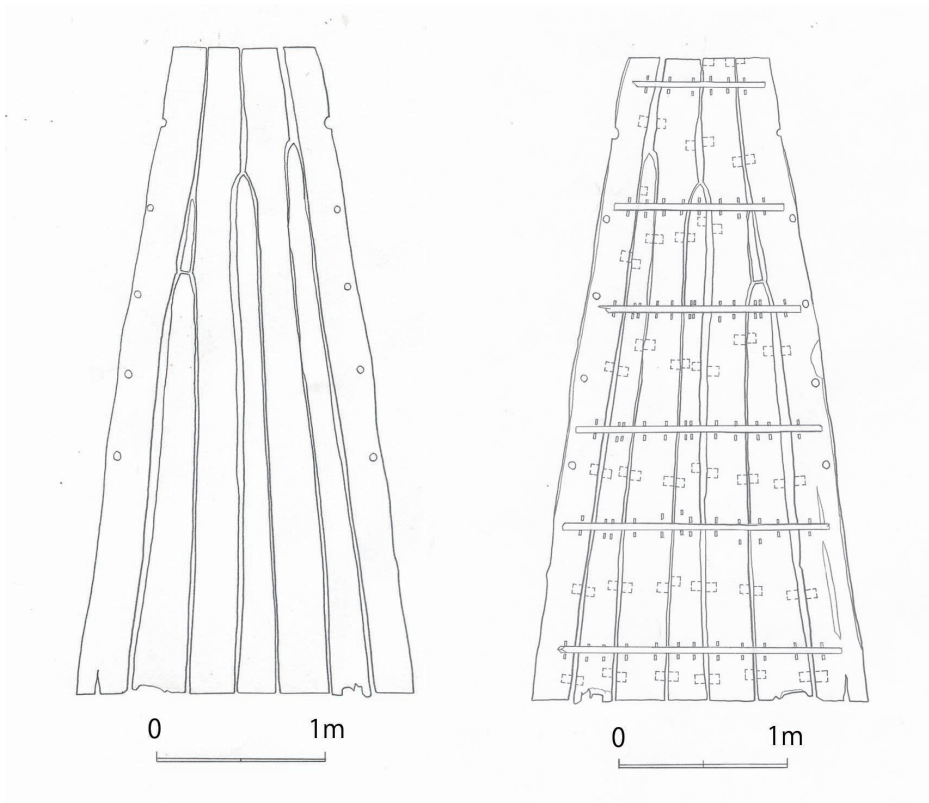


図3 甲板パネルの復原図の一例（左；上面、右；下面）

出) 他である。このほか、ピット内の部材の配置や部材そのものの三次元スキャナーによる測量(東京大学生産技術研究所大石岳史研究室)やCG、模型製作(女子美術大学内山博子研究室)を並行して進めている。

④大エジプト博物館保存修復センターへの移送

測量を終えた部材は大エジプト博物館での組み立て復原を待つ間、保存環境の整った大エジプト博物館保存修復センターへ移送してそこで保管をする。2016年までに469点、そして2017年は138点(総計607点、10月末現在)の部材の移送を終えている。この作業の担当は日本側が黒河内宏昌(前出)、エジプト側がアイーサ・ジダン(前出) 他である。

⑤広報・学会報告

日本国内では富山、静岡、福岡で開催された、『国立カイロ博物館所蔵・黄金のファラオと大ピラミッド展』〔監修；吉村作治、協力；国立カイロ博物館、エジプト・アラブ共和国考古省、独立行政法人国際協力機構(JICA)ほか〕において、本プロジェクトを紹介するコーナーを設け、広報活動

を行った。また「人生最後の挑戦！ピラミッドの謎解明の鍵を握る太陽の船復原へ！」(代表；吉村作治)のタイトルで、4月～6月の3カ月間にわたってREADYFOR株式会社においてクラウドファンディングを展開。当初の目標額2000万円を大きく超える援助をいただくことができた。

一方、③の成果である図面と復原考察が、本学紀要にて公表されている(柏木裕之、山田綾乃、「クフ王第2の船実測調査報告その1-甲板室部材について」『昌平エジプト考古学会紀要』第4号2017年pp.16～71)。

来年2018年も引き続き上記の作業と研究を継続し、2020年3月の完了を予定している。

(3) ギザ台地西部墓地探査プロジェクト(高橋寿光)

今年度のギザ台地西部墓地探査プロジェクトは、2017年3月26日から4月24日、そして2017年8月1日(火)から8月14日(月)にそれぞれ第2次調査、第3次調査を実施した(図4)。

今年度の調査では、西部墓地の中でもヘムオンのマスタバ墓(G4000)を中心とし、3次元地図の作成とGPR、EM探査機などによる探査を実施した。ヘムオンはクフ王の宰相を務めた人物で、ピラミッドを設計した人物としても知られている。そのマスタバ墓は西部墓地の中心に位置しており、西部墓地で最も重要なマスタバ墓の一つである。



図4 西部墓地調査風景

3次元地図の作成に際しては、SfM (Structure from Motion) と呼ばれる技術を用いた。SfMは、デジタルカメラによる2次元の撮影画像から、3次元モデルを作成する技術である。

調査対象としたヘムオンのマスタバ墓 (G4000) を中心に、7メートルの長さの棒にデジタルカメラを設置し、高所から約3500枚の写真撮影を行った(図5)。撮影した写真は、Agisoft社のPhotoScan Professionalを使用し、3次元地図化を行った。また、Leica社のトータルステーションを用いて、基準となる点を測量し、3次元地図に反映していった。結果、従来の地図と比較して、これまでにない高精細な地図を作成することができた(図6、7)。

また、3次元地図を作成した区域を中心として、GPR、EM探査器などを用いた探査を実施した。結果、特にヘムオンのマスタバ墓の南側に広がる未発掘区域において、遺構と考えられる反応を得た。その他、ヘムオンのマスタバ墓の礼拝所やマスタバ墓の間の通路において、遺構と考えられる反応を得た(図8)。



図5 高所からの写真撮影の作業風景

(4) アブ・シール南丘陵遺跡プロジェクト (河合望)

①はじめに

アブ・シール南丘陵は、古代エジプト有数の墓地遺跡であるサッカラとアブ・シールの間の西側に位置する独立丘陵で、1970年代にはエジプト軍の施設があり、長年の間考古学者が調査できない場所であった。また、18世紀のナポレオンのエジプト遠征以来、欧米の調査隊が遺跡地図を作成してきたが、これまで遺跡地図にも含まれず、全く遺跡の存在が確認されていなかった。1991年に日本隊は初めてこの丘陵に鋤を入れ、ラメセス2世の第4王子カエムワセトの葬祭殿を発見し、以後王朝時代の開闢からグレコ・ローマン時代に至る様々な遺構や遺物を発見してきた。丘陵頂部には、カエムワセト王子の葬祭殿の他に、これまでに第18王朝のアメンヘテプ2世およびトトメス4世が造営した日乾煉瓦遺構、そしてカエムワセト王子の娘とみられるイシスネフェルトの墓が発見されている。丘陵の斜面からは、古王国時代第3王朝のジェセル王の階段ピラミッドと築造技術が同じ、大型石造建造物である石積遺構が発見され、その背後にはシャフトと東西の地下室があり、内部か



図6 今年度調査において作成したヘムオンのマスタバ墓 (G 4000) とその周辺の3次元地図

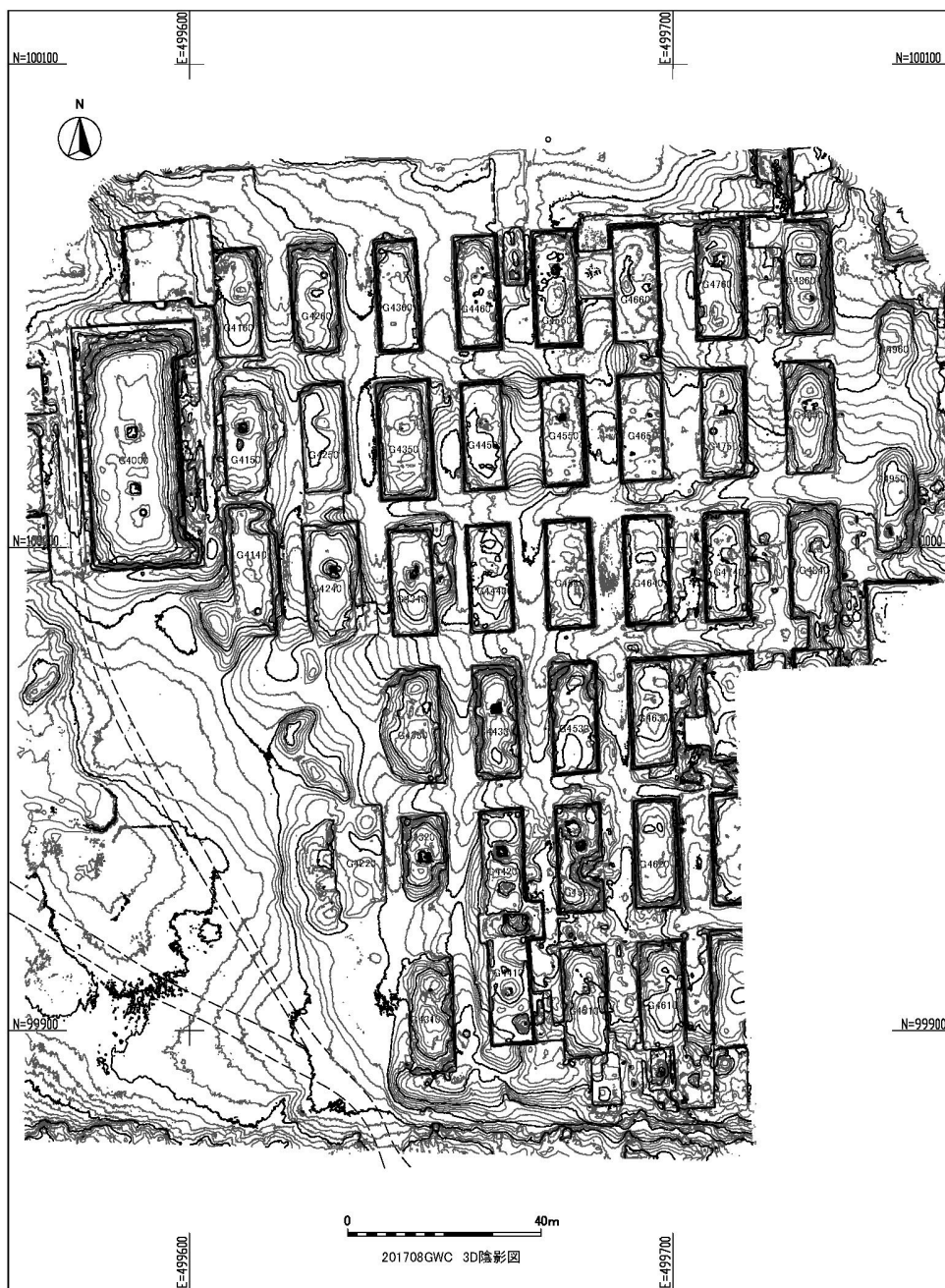


図7 ヘムオンのマスタバ墓 (G 4000) とその周辺のコンタ図

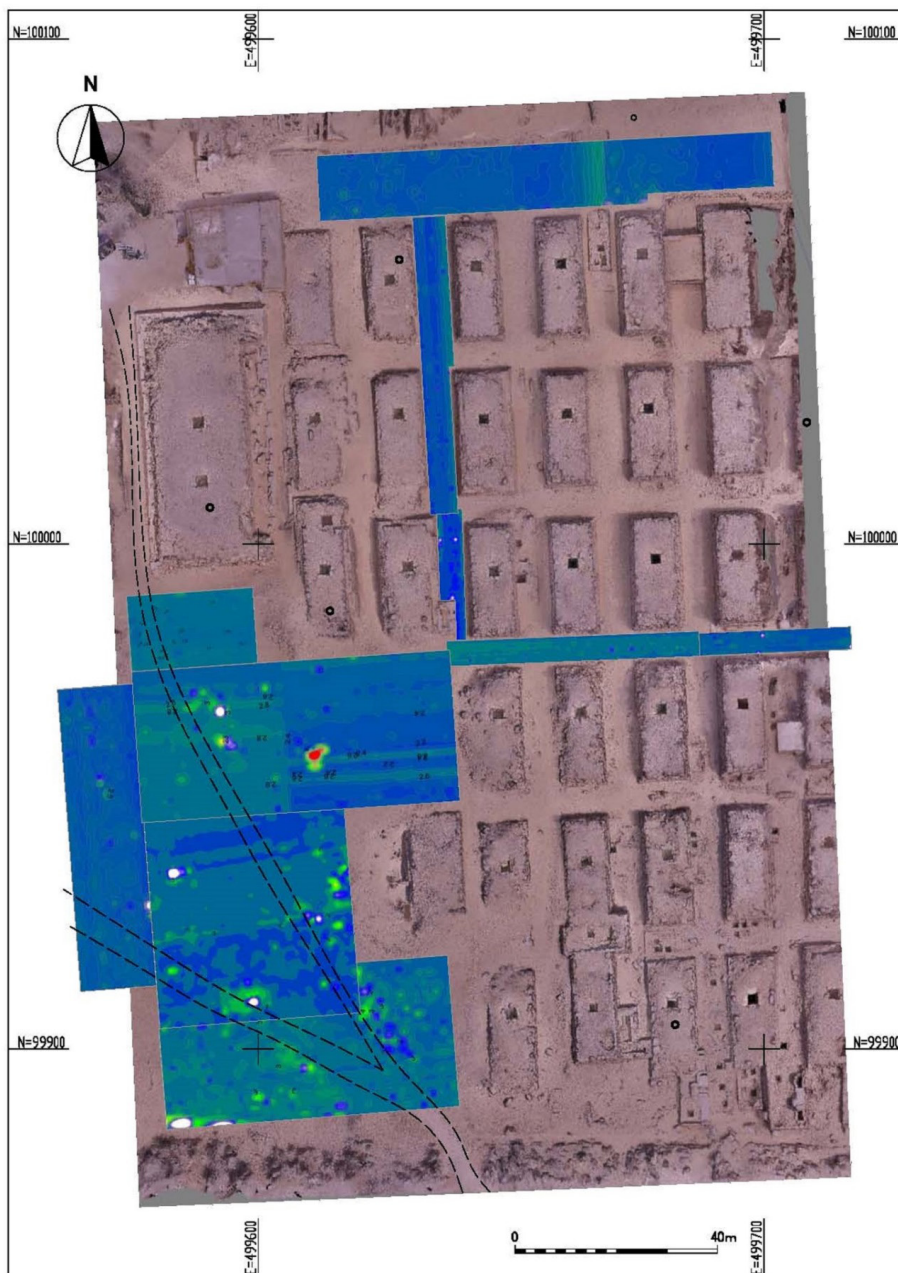


図8 ヘムオンのマスタバ墓 (G 4000) とその周辺の探查結果 (磁化率)

ら初期王朝時代から古王国時代初期に年代づけられる遺物と中王国時代に年代づけられる遺物の2種類が出土した。また、この地下室から約10m北に位置する場所には岩窟遺構があり、内部からライオン女神と大ピラミッドを建造したクフ王を象ったテラコッタ製像が複数発見された。これらの多種多様な遺構と遺物の存在から、アブ・シール南丘陵は、古代エジプト王朝時代の「聖なる丘」であったと推測される。

近年のアブ・シール南丘陵遺跡調査は、丘陵頂部の遺構における補足的な発掘調査とイシスネフェルトの石棺の記録と保存修復作業を主眼にしてきた。2017年8月19日から31日にかけては、イシスネフェルトの石棺の記録作業と保存修復作業、丘陵頂部のカエムワセトの葬祭殿とイシスネフェルトの墓のトゥーム・チャペルの部分の保護、整備、そしてこれらの遺構周辺の物理探査が実施された。本稿では、これらの調査の概要について報告する。なお、イシスネフェルトの石棺の保存修復作業については、住友財団の海外の文化財維持・修復事業助成の助成金を賜っている。

②イシスネフェルトの石棺の保存修復と記録

イシスネフェルトの石棺は、イシスネフェルトの墓の埋葬室の南西角に穿たれた掘り込みの中に安置されていたため、これまで南側と西側の壁の保存修復作業が困難であるだけでなく、壁面に浮彫りで施された神々の図像やヒエログリフの碑文の記録も十分に行えない状態であった。そこで、2014年の第23次調査と2015年の第24次調査において石棺の移動作業が行われ、埋葬室の中央に置かれた木製の台に配された(図9)。2016年の第25次調査では、埋葬室に置かれていた石棺の破片を考古省のサッカラ遺物倉庫に移動する作業が実施されたが、保存修復作業は行わなかった。

今次調査においては、保存修復師の苅谷浩子氏が保存修復作業を実施した。まず石棺の移動の際に表面を保護する目的で覆っていた和紙を外す作業が行われた。観察した限りでは、顔料は剥離しておらず、良好な状態で保管されていた。和紙を外す作業では、1:2あるいは1:2の比率のエタノール(アセトン)の溶液を染み込ませて刷毛とピンセットを用いて少しずつ丁寧に除去していった。さらに、亀裂のある部分に補強用に覆ったガラス・ファイバーも同じように外した(図10、11)。

石棺の安定性については、柏木裕之氏が精査を行った。石棺の置かれた木板は、やや撓んでいるようで、南西角部分が傾いていた。これについては、今期調査の終わりまでに調整を行った。今後の抜本的な保存修復作業にあたっては、十分重量に耐える、安定した台座が必要と判断された。



図9 移動前に保護をしたイシスネフェルトの石棺



図 10 和紙とグラスファイバーが貼られた表面（左）和紙とグラスファイバーを剥がした表面

石棺表面に貼られた保護用の和紙の除去と台座の安定化の後、考古班を中心に石棺の細部の観察・記録とデジタルカメラによる三次元モデル作成のための作業を行った。特に、今回の作業において報告に耐えうる写真撮影と記録ができた。今後の報告の出版に役立てたい。

次回以降は、イシスネフェルトの石棺を埋葬室に移動するかどうかも踏まえ、今後の保存修復計画を策定し、抜本的な作業の実施を試みたいと考えている。

③遺構の保護作業

丘陵頂部のカエムワセトの葬祭殿とイシスネフェルトのトゥーム・チャペルは、発掘後にオリジ



図 11 保護用の和紙を剥がした後のイシスネフェルトの石棺の表面（南面）

ナルの壁面や床面などを埋め戻し、砂で保護する策を講じたが、長年にわたり劣化が進み、保護用の壁が痛み、砂も風で飛ばされて遺構が露出する状況が観察されたため、今次調査において両遺構の全面的な保護を行った(図12、13)。まず、石材を積んで造った保護壁の目地の部分の漆喰が剥げ落ちていたので、セメントに石膏と消石灰を混ぜて目地の補修を行いながら、保護壁を整備し、保護壁内の古代の壁体や床面の上を砂で覆い、その上から砂利や礫を敷いて保護を行った。なお、今回の保護作業は一時的なものであるので、将来の遺構の修復整備計画について具体的な作業の準備を進めたいと考えている。



図 12 保護終了後のカエムワセトの葬祭殿



図 13 保護終了後のイシスネフェルトのトゥーム・チャペル

④遺構周辺の物理探査

イシスネフェルトのトゥーム・チャペルの東側とカエムワセトの葬祭殿内部の西端部において物理探査を行った。三井考測によってEM（電磁誘導）探査が実施され、比抵抗および導電率の結果が示されたが、自然地形の様相を呈しており、未知の遺構の存在を示す反応を得ることができなかった。

⑤まとめと今後の展望

イシスネフェルトの石棺が発見されてから8年の歳月が立ち、ようやく南側と西側の壁面の装飾を記録・観察することができた。この間、2011年の革命などで調査の延期を余儀なくされたが、ほぼ毎年調査を継続することができ、このような成果を得ることができた。今後石棺については、現実的に物理的な損傷を被ることなくシャフトの外へ持ち運ぶことが技術的に可能なのか慎重に検討し、今後の保存修復計画を考え、作業を実施していきたい。また以降についても現状の一時的な保護でなく、抜本的な整備方法についても検討していきたいと考えている。

（5）ダハシュール北遺跡プロジェクト（矢澤健）

2017年のダハシュール北遺跡調査は1月24日から2月23日に実施された。第24次となるこの調査では、ダハシュール北遺跡で最初に発見された新王国時代の人物「王の書記イパイ」のトゥーム・チャペル北東に調査区を新たに設定し、発掘を実施した。

調査区は南北15m、東西25mであり、地上部の発掘調査の結果、16基のシャフト墓（シャフト番号134～149）と1基の浅い土坑墓が発見された。シャフト墓は16基中12基の発掘を実施した。ここでは、今次調査の主要な成果について報告する。

①シャフト134

シャフト134の開口部は南北3.0m、東西1.5mの長方形で、シャフトの深さ2.2mと比較的浅く、地下室は持たない構造だった。底部に近いレベルで崩れた日乾煉瓦を大量に含む層があり、人骨が発見された。中王国時代の人型木棺の鬘部分に装飾として使用されたと考えられる半球状のファイアンス製品（図14）が96点出土した。径約2cmで球面部には縞状に筋が入っており、同様の装飾は本遺跡のシャフト65から未盗掘で発見されたセベクハトの人型木棺でも使用されていた。その他、ファイアンス製ビーズ、土器片、金箔片が出土した。土器は中王国時代後期に年代づけられる。人骨の分析は未着手のため、被葬者の数や性別、推定年齢などは不明だが、中王国時代後期に人型木棺を利用した埋葬がこのシャフト墓で行われていたことは確かである。



図14 シャフト134出土 ファイアンス製品

②シャフト137

シャフト137の開口部は南北1.1m、東西2.1mの長方形で、シャフト部の深さは8.6mである。シャフト底部から東側と西側に地下室が発見された（それぞれA室、B室）。B室は幅0.9m、奥行1.2m、高さ1.0mで、部屋として使用されたとは考えにくいサイズである。A室の平面は南北6.0m、東西4.7mの矩形で、天井高は1.5mである。

B室から遺物は発見されなかった。A室からは大型の石灰岩製ステラの断片、人型木棺片、陶棺片、大量の人骨、スカラベ、大量の土器、石製容器片、石灰岩製レリーフ片、ファイアンス製の指輪片、ガラス製の象嵌の断片などが出土した。注目されるのは大型のステラ片（図15）であり、高さ72cm、幅36cm、厚さ21cm、左から右方向の12行のヒエログリフによる碑文が刻まれていた。内容は死者の書の第15章にある太陽神への賛美であり、サッカラのポスト・アマルナ期のステラやピラミディオン、墓のレリーフに例がある。被葬者の名前や称号などが特定できる部分は含まれていなかった。ステラは地上の建造物の一部を構成していたものと考えられるが、シャフト137の地上部にはトゥーム・チャペルのような上部構造の痕跡は認められなかった。この断片は本来この墓に属するものではなく、他の墓から再利用の目的で持ち込まれたものと推測される。

③シャフト142

シャフト142の開口部は南北1.6m、東西0.9mの長方形で、シャフト部の深さは9.0mであった。シャフト最下部から南側と北側に地下室が設けられていた（それぞれA室、B室）。A室は南北2.5m、東西2.4、天井高1.2m、B室は南北3.1m、東西2.5m、天井高1.1mである。

シャフト最下部の堆積から、木製シャブティ、2体の石製容器を模倣した土器が発見された。石製容器の模造土器は2体とも同じ形状で、一方は黒、他方は赤で同様の彩色が描かれており、対に



図 15 シャフト 137 出土 石灰岩製ステラ片



図 16 シャフト 142 出土 石製容器の模倣土器

なっていた (図16)。酷似した例がテーベのチャヌニ墓 (TT74) で発見されており、トトメス 4 世の治世に年代づけられる。木棺片がシャフト部およびA室から発見されており、黒色を基調とし碑文や図像が彫刻によって表現されていた。碑文から木棺の所有が「ネブセニ」という名前であること

が判明した。また陶製のカノボス壺が発見された。イムセティと考えられる人の顔を模した蓋は、ロクロ成形で表面に粘土を追加して細部が形作られていた。テーベのセンフェリ墓 (TT99) から形状や製作技法で類似するものが発見されており、この例はトトメス3世の治世中期から後期頃の土器と共伴していた。以上のように第18王朝中期頃のテーベの類例から、この時期での本遺跡とテーベ地域との関係が注目される。

④まとめ

第24次調査では遺跡の北東側に新たに発掘区を設定した結果、中王国・新王国時代の両方でこの遺跡の中でも比較的古い時期の墓が発見された。ダハシュール北遺跡から見えるメンフィス・ネクロポリスの歴史を補完するものとして重要な成果と言える。

(6) 王家の谷アメンヘテプ3世王墓プロジェクト (現在休止中)

(7) 事業報告 (岩出まゆみ)

2017年の事業活動は以下です。

①エジプト展の開催 (2016年12月17日～2017年4月10日)

福島県いわき市石炭化石館に於いて「吉村作治のエジプト展 ―ピラミッド・ミイラ・ツタンカーメンの謎―」を開催しました。

②ダハシュール北遺跡の発掘調査 (1月21日～2月28日)

ダハシュール北遺跡第24次調査を行いました (日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究 (A) 「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」 (研究代表者: 吉村作治、課題番号: 26257010))。

③ギザ台地西部墓地探査プロジェクト (3月26日～4月24日)

第2次ギザ台地西部墓地探査プロジェクトを実施しました (吉村作治他2017, 「第2次ギザ台地西部墓地探査プロジェクト報告」, 『昌平エジプト考古学会紀要』第4号, pp.3-15)。

④シンポジウム (6月26日)

「第6回太陽の船シンポジウム“第1と第2の船について”」を早稲田大学大隈小講堂で行いました。

⑤公開研究発表会（7月4日）

いわき市の本学201教室で地域住民向けに「第2回公開研究発表会&最新発掘レポート」を開催しました。

⑥アブ・シール南丘陵遺跡の調査（8月13日～9月25日）

第26次アブ・シール南丘陵遺跡調査を行いました（日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(A)「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」(研究代表者：吉村作治、課題番号：26257010)。

⑦エジプト・フォーラム（12月10日）

「エジプト・フォーラム26 最新発掘レポート」を早稲田大学大隈記念講堂で開催しました。

⑧テレビ番組（12月10日）

「古代エジプトミステリー紀行 大ピラミッド新発見！」(吉村作治出演・監修)が放映されました。

⑨第2の太陽の船プロジェクト（通年）

クフ王第2の太陽の船保存・修復・復原プロジェクトを継続しました（日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(A)「古代エジプト・クフ王第2の船の復原に関する研究」(研究代表者：黒河内宏昌、課題番号：26257309)、独立行政法人国際協力機構(JICA)「大エジプト博物館建設事業実施促進支援業務(第二の太陽の船復原に係る技術支援)」)。